

新たな移住・定住に関する研究会（第4回）【開催概要】

1 日 時

令和3年6月4日（金）午前10時～午後12時まで

2 形 式

Web 会議（Zoom）

3 出席者

【研究会メンバー】

井上章一氏、内永ゆか子氏、大野木啓人氏、小林正忠氏、佐野奈帆氏、
鈴木博之氏、田村篤史氏

【京都府】

山下副知事、岡本企画調整理事、吉田企画参事

4 議事内容

<主な意見>

■地域情報の発信について

- 施策のパッケージ化は必要。例えば、生活設計や住居の選定をする際、候補地を訪問する前に一定程度の情報がないと、実際に候補地に行く動きは起こりにくい。
- 移住の決め手となる地域の特徴が明示されることが必要。住居や子育て環境、仕事などの条件面も大切だが、感覚的に惹きつけられるものをどのように作り上げるかが重要ではないか。地域住民、地域で活動している事業者、市町村、府が集まって考えるべき。
- 移住者が新たな人生を地域でつくり上げるためには、レベルの高い情報が必要。地域側はポジティブなことについてはリストアップできるが、移住者の不安をどう取り除けるかに力点を置いた方がスムーズに移住できるのではないか。

■施策の考え方について

- 京都府として2030年、2040年に、どういう状態になっていることを目指すのか、移住促進特別区域における具体的な目標設定が必要。その目標を達成するための積極的な施策を検討すべき。時間軸と規模感が分かる具体的な数字目標を作る。区域の住民が自分の地域をどうしたいのか明確にすること。居住するのみのエリアであっても、そこから例えば半径10キロ20キロ以内の場所に必ず働く場所があるという広域的な地域デザインを行政が行う等。各地区でできることから発想すると、現状の延長線に陥りやすいので、理想論から考える方がよい。
- 総花的に実施するよりも、仮説に応じて限られた資源を集中投下していくということが必要。このためには、施策を実施する市町村や地域に覚悟を持って取り組んでもらうことが重要。
- 失敗するという覚悟の下に、リスクヘッジしながら具体的な施策を進めていくことが必要。まずはやってみて、フィードバックを受けて、その次のステップに行くべき。変数が多い方程式を解く場合、変数を一個一個潰すよりも、ある程度変数を定数に変更し、小規模なところから試した方がよい。
- 施策について、移住検討者のニーズから設計することと、各地域がどういう地域を目指していくのかを言語化した上でパッケージ化していく手法があり、どちらも必要。
- 人口が少なくなった中で、なおかつ魅力を維持するということに、21世紀後半にかけての日本の課題があるのではないか。人口増だけを目指すのではなく、豊かな停滞の可能性も探りたい。

■検討すべき施策内容について

- 企業におけるエンプロイージャーニーマップのように、移住支援者が移住者に対し、移住初日はもちろんのこと、そこから1週間後、1か月後、3か月後、半年後、1年後と接点をもって支援することで、移住者は日々の生活を乗り越えていく。そこまでやって初めて、移住者はコミュニティに入れるのではないか。そういった施策がパッケージに入っているとよいのではないか。（移住意思決定後、移住までの準備期間もジャーニーに加えてよいと考える）
- 地域に関係案内所のような、人が異動という形でいなくならないような仕組みがあれば、移住者のアフターフォローという意味でよいのではないか。
- 移住者起業支援のような、新しく移住されるような方、それから関係人口の方がどういう新しい価値観を持ち込み、新しい産業や雇用を生むことに対して支援する仕組み入れて欲しい。今住んでいる方やまちの特徴との整合性は重要であるため、例えば、新しく移住する方と今住んでいる方がチームを組んで提案するようなことは手厚く支援する等、メリハリをつけた支援制度がよい。
- 継業支援という施策と移住者のマッチングの観点も入れて欲しい。担い手がおらず閉業するよりは、新しい方に入ってきてもらいバトンを渡していく仕組みができると、新しいタイプの移住者として、継業移住者という切り口はよいのではないか。
- 新たなまちおこしについて、移住者だけがやっていることがある。学生を一つの人材として使っていくことが効果的。ただ、それと同時に新しく地域に住む際に、今までのすばらしい資産や文化や資源があるからという、それを何とか維持するためという考え方はあまり効果がないのではないか。移住者は古い良いものがあるからではなく、これから、ここがどれだけの可能性を持ってるかということに、価値の視点があるのではないか。
- 交流拠点のハードの新設よりどういうソフト事業があるかの方が重要。既に活用できる場所があると認識している。その場所でソフト事業を担う方を1人もしくはグループで指名し、交流を促す拠点づくりをすべきではないか。
- 多くの学生が、若い時代を京都市内で過ごすため、大学在学4年間の中に、京都府の農山村漁村にプレ移住、プチ移住として、1週間～1か月の体験移住のようなことを味わってもらえるかどうか。やがては他の地方へ出て行く学生が、府の魅力を全国で語ることが期待できる。